

スウェーデンのデザイン

スウェーデンのデザインの新しいキーワードは「多様性」。現在、スウェーデンのものづくり技術や一般のデザインにおいては、情緒的価値が機能と同じくらい重要視されている。美の基準から伝統的な仕事のやり方まで、あらゆるものが徹底的に吟味されている。

スウェーデン文化交流協会発行
2008年2月 FSJ 111 a

ファクトシートシリーズ
www.sweden.se

Si.
Swedish Institute

スウェーデンの新たな工芸の世界

スウェーデンの工芸が、今日ほど活気にあふれ、様々な表現を生み出してきたことは、これまでほとんどなかった。

これにはいくつもの理由がある。一つは、従来の工芸への姿勢を疑問視する態度

が、6、7年前スウェーデンの工芸大学で多くの学生の共感を得たことである。当時、大学生や卒業したばかりの大卒者たちの間では、それまで技術や材料や機能にばかり深い関心を寄せていたのとは打って変わって、自分の作ったもので何かを語りたい、

その作品を使って現代を批評し、自分自身の活動についてコメントしたい、という新たな願いを持ち始める者が増えていた。この過程で、商業文化とそれを表す様々な発露が、スウェーデン工芸技術の、作り物ではなく純粋だと思えるものを探求するという伝



サンドラ・アールによる照明 写真: サンドラ・アール



統的な美学と同じレベルにまで引き上げられた。デザイン、アート、ファッション、工芸の境界線はますます薄れていった。

物語を伝える作品

この過程で、工芸作家のサンドラ・アールが果たした役割を見過ごすことはできない。2001年、アールはジャーナリストのエンマ・オルソンと協力して、『スウェーデンのスタイル—現代デザインについての神話』(Svensk smak — Myter om den moderna formen)という本を出版したが、これが与えた影響は甚大なものだった。それは、現在もこれまでもデザインの世界の最高品質とされるものを判断してきた基準——そして人々——についての論争を巻き起こし、とりわけ「プロンドでピュアでシンプル」という、スウェーデンのデザインに対する昔ながらの決まり文句

に疑問を投げかけた。アール自身が作った陶器やガラスは、陶器やガラスのようにとはどうも見えぬ。アールは、20世紀の大半を通じて、陳腐で「装飾的」だとして偏見の目で見られてきた特性をその作品に用いている。この陳腐とか「装飾的」という言葉は、「形は機能に付随する」という主義を奉じる者にとっては挑発的な言葉である。アールの陶器やガラスの作品にはリボンやプラスチックの鎖が使われ、連続コマ漫画もついている。彼女からインスピレーションを得た数人の、若者を中心とした支持者は、その不調和によって従来の基準に注目させるスタイルに倣うようになった。またアールは、作家たちの間や社会で活発化する工芸についての議論にもいっそう拍車をかけていく。

現在の世界を疑問視する工芸技術を発達させたもう一人のパイオニアは、銀細工

作家のアンデッシュ・ユングベリである。ポウルや水差しといった彼の巨大な銀の作品は、現代主義的な銀細工の伝統に従い、なめらかな銀と磨き抜かれた輝く表面を備えている。だが同時に、これらの作品は、実用製品の姿はこうあるべきで、その周囲との関係はこうあるべき、という偏見を強調したものになっている。例えば水差しはテーブルの上ではなく下に置かれている。スウェーデンの銀作品は、昔の独特で飾り気のないエレガンスや名職人による美学から、より幅広い表現へと徐々に移行しつつあるが、ユングベリは近年のスウェーデンの巨大な銀作品の発達に大きな役割を果たしている。

反抗から生まれたテクニック

またスウェーデンの工芸作家は最近、「よい工芸技術」とは何かについての従来の考え方を見直しており、それが様々な新しい表現の使用にもつながっている。銀細工作家のイェンニ・エードルンドは、エナメルは焦がしてはいけない、銀は垂れ下がるほど熱してはいけないという伝統的な考えがあるが、自分がたまたまその表現を素晴らしいと感じ、それこそ自分が作りたいものだったとしたらなぜいけないのかと自問した。彼女は工芸の慣例を破ることで自分自身のスタイルを模索し、それによって権威ある表現力豊かな美学を生み出したのである。

一方、セラミック作家のグスタフ・ノーデンショルドは、セラミックの工芸技術は、手作り感や精巧な職人技を意識的に抑えることによって、素朴なよい出来栄を演出すべきだという暗黙の期待を、はっきり浮き彫りにした。手で粘土の形を作っていくのではなく、様々な道具の痕跡を残すようにし、旋



アンデッシュ・ユングベリ作 *Jug looking for new views* 写真: ホーカンソン/マンベリ
イェンニ・エードルンド作 *いぶし銀製 Simulacra* 写真: イェンニ・エードルンド
グスタフ・ノーデンショルド作 *Grena* 写真: グスタフ・ノーデンショルド

盤仕上げやキャンドルドリップリングなど、伝統的にセラミックでは用いない工芸技術を使った。そうして生まれた作品は、すぐれた職人芸によって生み出されたというより手短に効率よく仕上げた感が強い。そのためかえて人目を引く。これらは、以前のスウェーデンの工芸技術にはめったに見られなかった「流行を中心とした」作品でもある。

造形の回復

仰々しく凝った形を排した実用的なデザインの作品は、一般国民が合理的で質の高い実用品を使えるようにする、20世紀の「国民の家(folkhem)」という理念に基づいた「日用品にもっと美しいものを(vackrare vardagsvara)」というスローガンに代表される精神に根ざしている。この精神は長年、スウェーデンの工芸作家が作る作品にも強い影響を与えてきた。しかし近年、再び装飾的で造形的な側面が回復され、より伝統的な控えめでシンプルな美学と共存状態で活動している。宝石指輪のアーティストであるシャロット・シンディングの作品は造形的デザインのよい例といえよう。4インチのシリコン製の小鳥のついた指輪は21世紀初め

に大評判となった。2007年にストックホルムで開かれた展覧会で、シンディングはぶるぶる震える臓器のようなジュエリーを出品した。他にも同じような現代的な宝石デザイナーは何人かいるが、彼女の作品も、装飾に対する陳腐で機械的な態度とは何かを鋭く問いかけている。これらのジュエリーは話題性の豊富な作品で、勇気のある人しか身につけられない。

伝統に従う

若手の美大卒業生が仕事の仕方や自己表現の新たな方法を模索しているのと並行して、他の工芸作家はより伝統的な方法で仕事をしている。彼らは材料、テクニック、スタイルをとことん追求する。例えばセラミック・アーティストのユッシ・オイヤラは、表情豊かな低粘性の灰色の釉薬についてあくなき研究を続け、実用品セラミック・アーティストのエッレン・エークは、ストレスの多い現代社会に静けさを生み出すため、古典的なアジアの精神に即した作品を作りたいと願っている。

スウェーデンの現代工芸作家が用いる表現手段は実に様々で、それは豊かに広がるひとつの宇宙なのである。

関連リンク

ブロー&クノーダ (blås&knåda)
www.blasknada.com

ギャラリー・コンストエビデミン
(Galleri Konstepidemin)
www.konstepidemin.com/hnoss

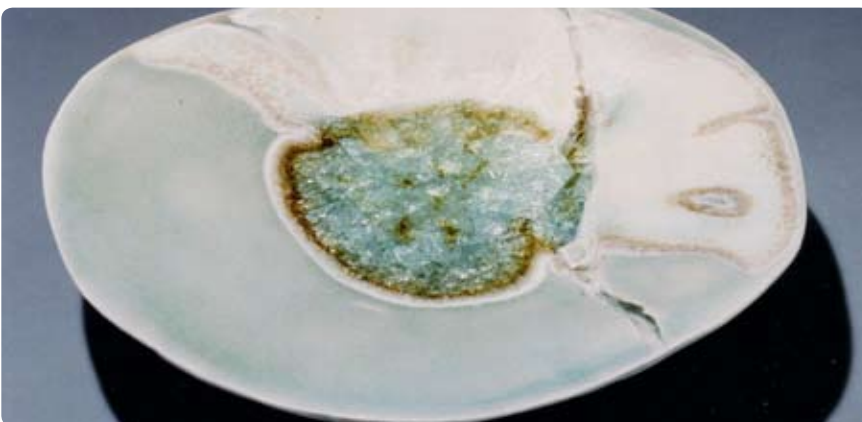
グスタフスベリス・コンストハル
(Gustavsbergs Konsthall)
www.gustavsbergskonsthall.se

カオリン(Kaolin)
www.kaolin.se

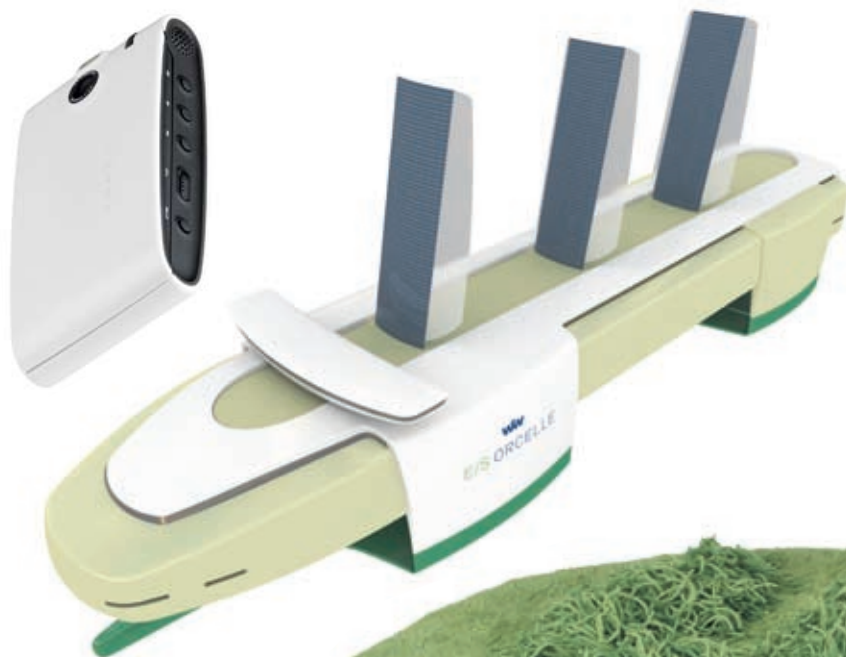
ニューティータ・スヴェンスクト・シルヴェル
(Nutida svenskt silver)
www.nutida.nu

プラチナ(Platina)
www.platina.se

WWIAFM
www.weworkinafragilematerial.com



シャロット・シンディング作 シリコン、銀、ファブリック製の鳥の指輪 写真: プラチナ ユッシ・オイヤラ作ストーンウェア 写真: ニーノ・モナストラ アウリ・ライティネン作ネクタイでつくられたブローチ 写真: プラチナ ハンナ・イエーレヘッド=ヒーヴィング作プレート 写真: トーマス D ヨハンソン エッレン・エーク作 Within 写真: ブレードリック・ヘニング



シンテス・スタジオ作 携帯電話
02 Cocoon
写真: シンテス・スタジオ
ノー・ピクニック作カーキャリア
E/S Orcell
写真: ノー・ピクニック
ブローベリ/リッデシュストローレ
作Hood Chair
写真: ヨハン・リッデシュストローレ
モニカ・フェシュテル作Moon
Cactus / ニナ・ヨプス
写真: E&Y

スウェーデンの工業デザインは絶好調

「スウェーデンのデザイン界は実に元気がいい—世界でも最高クラスだ」。2007年1月、スウェーデンで最大手の新聞ダーゲンス・ニーヘテル紙の国際デザイン審査員はこのような断言をした。そして事実、スウェーデンのデザイン界はこれまでの長年の状況に比べて活気に満ちている。90年代になってようやくネオ・モダニズムが主流となり、スウェーデンのデザインはシンプルさ、機能性、ブロードウッドといった伝統的な価値の象徴となった。しかしその状態は続かなかった。サンドラ・アールやアグリキュートに代表される新世代の若い工芸作家やデザイナーたちが、先人から受け継いだ価値に疑問を呈し、デザインに対してもっと破壊的で、完璧さに欠けた人間的な態度を熱心に提唱するようになったのだ。彼らの目から見ると、「日用品にもっと美しいものを」（その形は機能によって決まる）というスローガンの根本とな

る善意のイデオロギーは徐々に最初の勢いを失ってしまい、残ったものは排他性だけだった。この新世代の作家たちは、荒削りの作品で、日常的な創造性に根ざした新しい種類の民主的なデザインを生み出そうとした。彼らはフェミニズムとポストモダニズムからインスピレーションを受け、デザインはそれを使う人に、私たちが生きているこの歴史的、物質的な文化についてのメッセージを語る事ができるという主張を展開した。

スウェーデンの多元論

今日のスウェーデンのデザインの特徴をひとつ挙げるとすれば、それは多様性であろう。モニカ・フェシュテルの穏やかなミニマリストの家具が、フロントの荒っぽい実験的作品と共存している。フィリップ Kのようなベーシックなスウェーデンのファッションと、サンドラ・バックルンドの前衛的なニットが仲良く並んでいる。ストックホルム・デザイン・ラボの精密なグラフィック・デザイ

ンが、アンドレアス&フレデリカの芸術的だが非実用的なグラフィック・デザインと肩を並べている。またノー・ピクニックのような定評のある工業デザインスタジオが、メッセージを持ったデザインを専門とするシンテス・スタジオのような新興企業と一緒に仕事をしている。スウェーデンのように、一つの主義の下に皆が画一的行動を取る国にとって、これは驚くべきことだ。スウェーデンはこれまで、一度に一つの理想しか受け入れる余地を持たなかったのである。

領域の枠を超えたデザイン

今日では、デザイン、アート、ファッション、手工芸の境界線はほとんど消滅している。それは国際的に有名な工業デザイン集団「フロント」が実証している通りだ。2004年、覇気のないデザイン界に4人の女性たちが初めての作品——ネズミのかじった穴を模様にした壁紙や、ガラスの花瓶のような拡声器——を発表した。その後数年間、フロント

オーラ・ルーネ作イージー
チェア Boxer
写真: スカンディフォルム
サンドラ・バックルンドの
コレクション Don't Walk
写真: デニス・グルンステイン
フロント作 Horse Lamp
写真: フロント



は主にコンセプトデザインに携わってきたが、今では大量生産に費やす時間が増えてきている。例えば、オランダの家具製造会社のムーイのために制作したホースランプは、パレリーナをかたどった19世紀後半の磁器製ランプスタンドに倣った21世紀の作品である。

世界で活躍するスウェーデンのデザイン
現在、スウェーデンの多くのデザイナー

は、国際的に活躍している。90年代後半にその先達となったのが、建築家のトーマス・サンデルとトーマス・エーリクソンで、その後クラークソン、コイヴィスト、ルーネ（CKR）という建築家3人組が、世界各地にスウェーデンのデザインを広める働きをしてきた。1994年に設立されたCKRは、京都の複合ビルやウルクアイの住宅建築の設計を行うとともに、カップリーニ、ポッフィ、リビング・ディバ

ーニのような会社向けに家具もデザインしており、フロントははじめ国際的に認められたスウェーデンのデザイナーたちにとって、インスピレーションの源泉となっている。

デザイン政策

近年、スウェーデンの政治家もデザインの問題に関心を高めている。当時のスウェーデン政府は2005年をデザイン年に定め、

産業雇用通信省と文化省の双方が資金を抛出した。デザイン年のひとつの成果は、ストックホルムの国立博物館でコンセプトデザイン展が開かれたことだ。一部の批評家はこれを「デザインの爆弾」と呼び、これが現在のように多様性を広める働きをしたことが後に明らかになった。そのメッセージは若い世代のメッセージに相通じるものである。「現代のスウェーデンのデザインは長年、機能主義というイデオロギーを特徴とし、シンプルさと適切な機能を最優先にしてきた。しかし今日、スウェーデンのデザインは製品の機能性や美学を超えた価値を作り出そうとしている。それはコミュニケーションであり、生活の質であり、製品で何かを語るということだ。」

何かを語るという特徴は、今ではデザインのあらゆる面に見られる。機能性と工学技術という長い伝統を持つスウェーデンの工業デザインでさえ、製品に情緒的かつ人間的な価値を付加することがますます重視されつつある。特に、西洋世界全体を覆う「同じものばかりがあふれる大海」の中で、人目を引く際立った外見を与える方法として、その重要度は増すばかりだ。

たとえば、エレクトロラックスは数年前に、ハンド&フロア掃除機のエルゴラピドを設計して賞を受賞したが、使わないときでも見える所に置いておきたいと思うほど顧客に気に入ってもらえる、という点をデザインの重要な基準の一つに掲げていた。

デザイン研究

2005年のデザイン年を受け、当時の政府は国立のデザイン研究学校を創設する資金を抛出することにした。そして、19の高等教育機関がスウェーデン・デザイン研究ネットワークに参加し、2007年秋にはストックホルムの王立技術研究所を拠点とする研究大学を共同で立ち上げた。

しかしそれ以前にも、スウェーデンでは興味深いデザイン研究が行われていた。

関連リンク

スウェーデン・デザイン・アンド・クラフト協会 (The Swedish Society of Crafts and Design)
www.svenskform.se

スウェーデン工業デザイン基金 (The Swedish Industrial Design Foundation, SVID)
www.svid.se



トーマス・ベーンストランド、マティアス・ストールボム作照明Foto 写真: ヨアキム・ベルイストロム
フレドリック・マツソン作照明 PXL 写真: ポール・アラン

そのひとつが、スウェーデンのエネギー庁 (STEM) の資金援助により、インタラクティブ・インスティテュートの主導で行われた "Static" プロジェクトだ。これはデザインを活用してエネルギーへの認識を高めようというもので、プロジェクトでは「論理的思考の抽象的なパターンを具体化することで、物事は理解しやすくなる」という原則に従い、いくつもの試作品を制作した。例えば「電力認識コード」を使うと、機械がどれほどの電力を消費するかが一目で分かる。エネルギーを多く消費すると、ケーブルが強い光を放つ仕組みである。このプロジェクトでは、よい行いをすれば褒美がもらえる製品も制作している。電力消費を減らすと「花が咲く」フラワー・ランプがその例である。

フォルム/デザインセンター (Form/Design Center)
www.formdesigncenter.com

国立美術館 (Nationalmuseum)
www.nationalmuseum.se

レースカ工芸美術館 (The Röhsska Museum of Applied Art and Design)
www.designmuseum.se

スウェーデンのデザインにおいては、持続可能な未来を目指すという動きも盛んに行われている。特に2009年には、スウェーデンで世界的な関心が集まる国際ワークショップが開催されることになる。そのテーマ「都市を動かす」は、北部の都市キルナの経験を踏まえて定められたものだ。キルナでは大規模な鉱山活動が地盤沈下による裂溝の発生をもたらしている。今後は新しい都市計画に合わせて都市の中心を徐々に移動させ、将来的に環境に調和した社会を作り上げる予定である。このワークショップは、よりよいデザインを推奨・促進する企業、組織、機関の世界組織である国際工業デザイン団体協議会 (ICSID) の後援を受けて行われる。

スカンジナビアン・デザイン (Scandinavian Design)
www.scandinaviandesign.com

国際工業デザイン団体協議会 (International Council of Societies of Industrial Design)
www.icsid.org

Do you have any comments on this SI publication? Feel free to contact us at info@sweden.se.

このテキストは www.sweden.se でも閲覧できる。スウェーデン文化交流協会の事前の承認を得ずに再使用することを禁ずる。テキストの使用許可を得るには、webmaster@sweden.se に連絡のこと。写真やイラストの転記・転載を禁ずる。

スウェーデン文化交流協会 (SI) は、スウェーデンについての知識を海外に広めるために設立された公共機関である。スウェーデン社会のさまざまな側面について紹介するため、複数の言語でさまざまな出版物を刊行している。

スウェーデンに関するさらに詳しい情報は、www.sweden.se (スウェーデンの公式サイト)、あるいは自国のスウェーデン大使館または領事館まで。Box 7434, SE-103 91 Stockholm, Sweden | Phone: +46 8 453 78 00 | si@si.se, www.si.se, www.swedenbookshop.com